

(日置郡市来町大字川上字南安茶ヶ原中ほか)

位置と環境

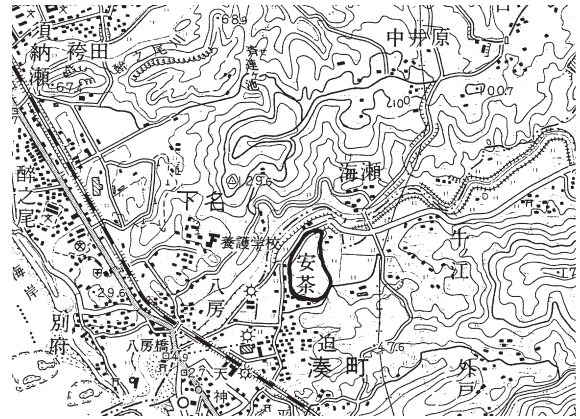
遺跡は、町役場がある町の中心部から北東に約1km離れた独立した標高約25mの台地上に立地している。台地は東西約250m、南北約500mの楕円形をしており、北東に細長く突き出している。台地全体が遺跡である。東にある牛ノ江の台地を隔てた中組集落の北西には、川上(市来)貝塚がある。

調査の経緯

平成8年(1996年)2月に行なわれた南九州西回り自動車道川内道路建設に伴い分布調査で確認され、平成11年度から平成14年度にかけて県教育委員会が本調査を実施した。調査対象面積は16,000㎡に及んでいる。

遺構と遺物

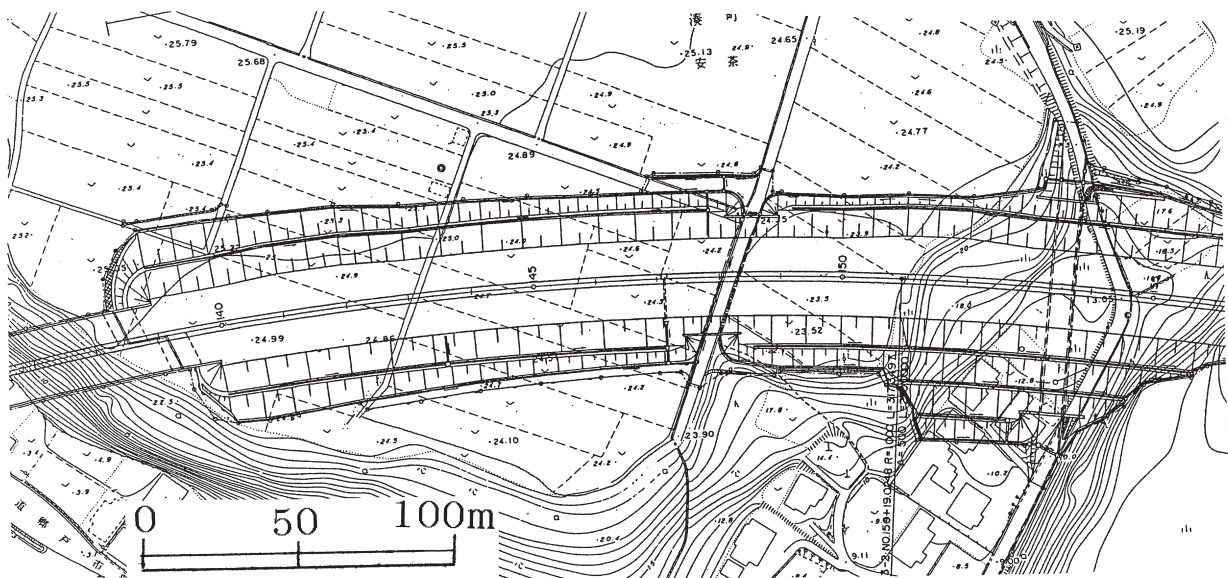
『日置厨』と墨書された須恵器の坏が土坑に遺棄された状態で出土したほか、台地南側の一段低い迫からは、流れ込みと見られる、やや磨耗した古墳時代の成川式土器が確認されている。また、矩形に掘り込まれた溝と、2棟の四面庇建物跡がほぼ南北に並んで検出されたほか、その地区の東につながる区域からは、北側に庇が取りつく片庇建物跡も見つかり、2間×3間を主とする掘立柱建物跡5棟も確認



第1図 安茶ヶ原遺跡の位置

された。これらの建物は、古代～中世のころのものと考えられるが、同時に所在したかどうかについては不明である。

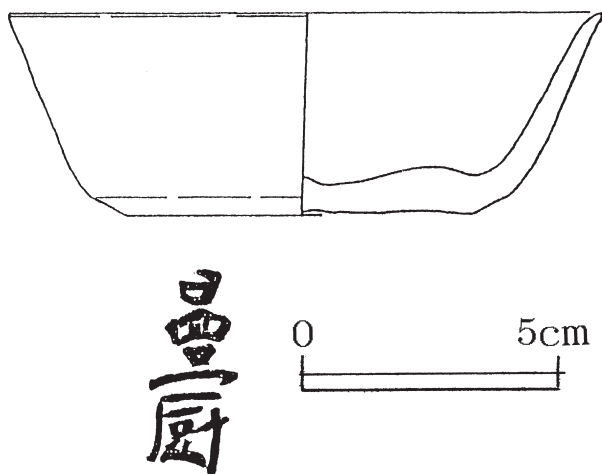
縄文時代早期や晩期の遺物も出土したほか、その層を含めて下層からも黒曜石が割合に多く出土したため詳しく調査を行なった結果、シラスの堆積からそれほど経過しない時期に起こったと考えられる水害などによって上流から流されてきたものと推定され、自然面や他の石などとの強い接触によりできた割れや磨耗がほぼ全部の礫に見られる。したがってこれらの黒曜石はすべて自然遺物と判断された。ただ、縄文時代晩期と考えられる剥片が10個ほどまとまって出土したものは、佐賀県腰岳産と見られることから、交流または交易によってもたらされた人工



第2図 調査地および周辺地形図

的な遺物であることはまったく疑う余地はなく、極めて貴重なものである。

『日置厨』銘の墨書須恵器が出土した土坑は、径約60cm程の不整形をしており、須恵器の壙2点と坏1点が割られた状態で斜め上向きに埋められていた。これら3点の遺物は、形態からみてすべて8世紀後半ごろのものと判断される。墨書は坏の底部外面に書かれている。県内における『厨』銘墨書土器の出土は川内市薩摩国府跡（『国厨』）、日置郡市来町町市ノ原遺跡・指宿市橋牟礼川遺跡・鹿児島市一ノ宮



第3図 『日置厨』銘墨書土器

遺跡（以上すべて『厨』）が知られている。

2棟検出された四面庇建物跡のうち、北側のものは南側のものより柱穴の直径や柱の間隔が大きく、東側には孫庇と考えられる柱穴の1列があるほか、南側にも接近して柱穴が東西に1列に並んでいる。と 北東部の庇の柱穴に近接して土坑が検出され、その中から糸切り底の土師器の皿6枚がほぼ1箇所にとめられた状態で出土しており、この建物の鎮壇具として埋められたと考えられる。また、3方を矩形の溝が巡っており、南側のみ開けている。南側の先は窪んでおり、最近まで小道があったことから、この建物にいたる道が存在していたと推定される。

南側の四面庇建物跡の東および西側には、2間×3間の掘立柱建物跡があり、見方によっては南側を開口した「コ」字状の建物群とも見える。なお、この建物を切る溝は、建物よりも新しい。



第4図 遺構全体図

北側の四面庇建物跡を囲むような溝の東側の先には方形竪穴建物跡が確認され、また、この建物の東側の延長部分に北側に庇を持つ片庇建物跡があり、軸が揃っていることから同時期の可能性が高い。

特徴

古代末～中世初期の在地領主層と考えられる居宅跡と推定され、当時の富豪層の邸宅が理解できる。

資料の所在

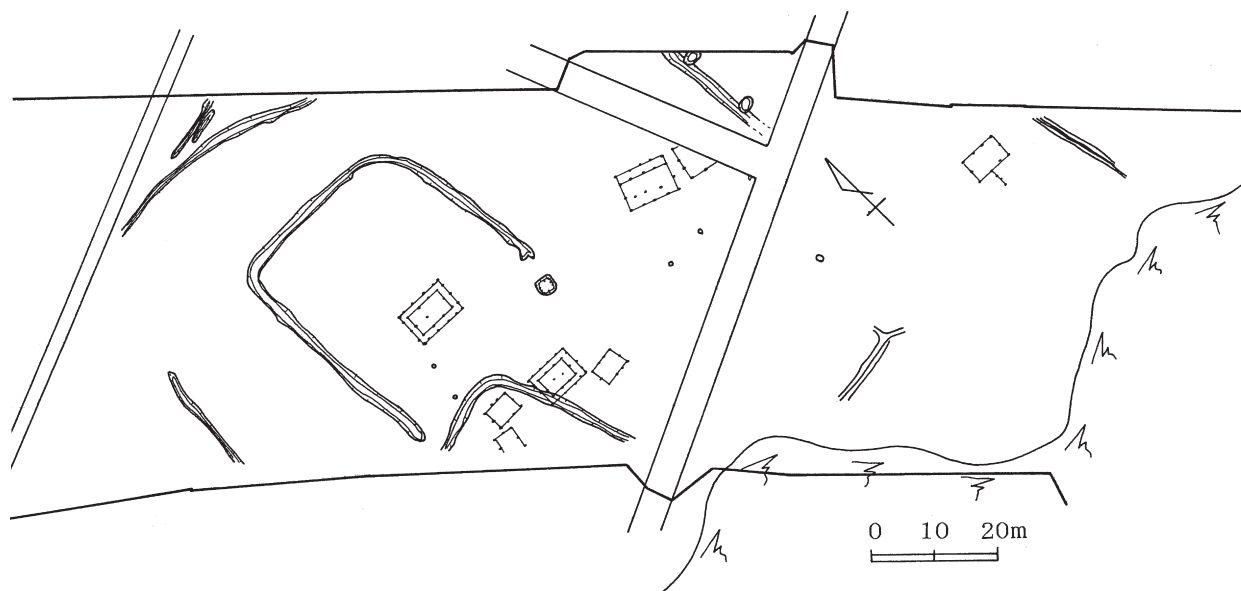
出土遺物は、鹿児島県立埋蔵文化財センターに保管されている。

参考文献

鹿児島県立埋蔵文化財センター1999～2002『南九州西回り自動車道川内道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査事業報告書』
(繁昌正幸)



第5図 中心部分遺構図



第6図 中心部分主要遺構図